

原田 博史

(生長会病理センター 府中病院 病理診断科)

【症例】82歳、男性

【病歴】右耳下部の主張を自覚するも放置。数ヶ月経っても消退しないため、気になり近医耳鼻科を受診。耳下腺腫瘍と診断され、地域の総合病院へ紹介、浅葉切除術を施行された。以後再発や転移の兆候は認められない。

【病理所見】

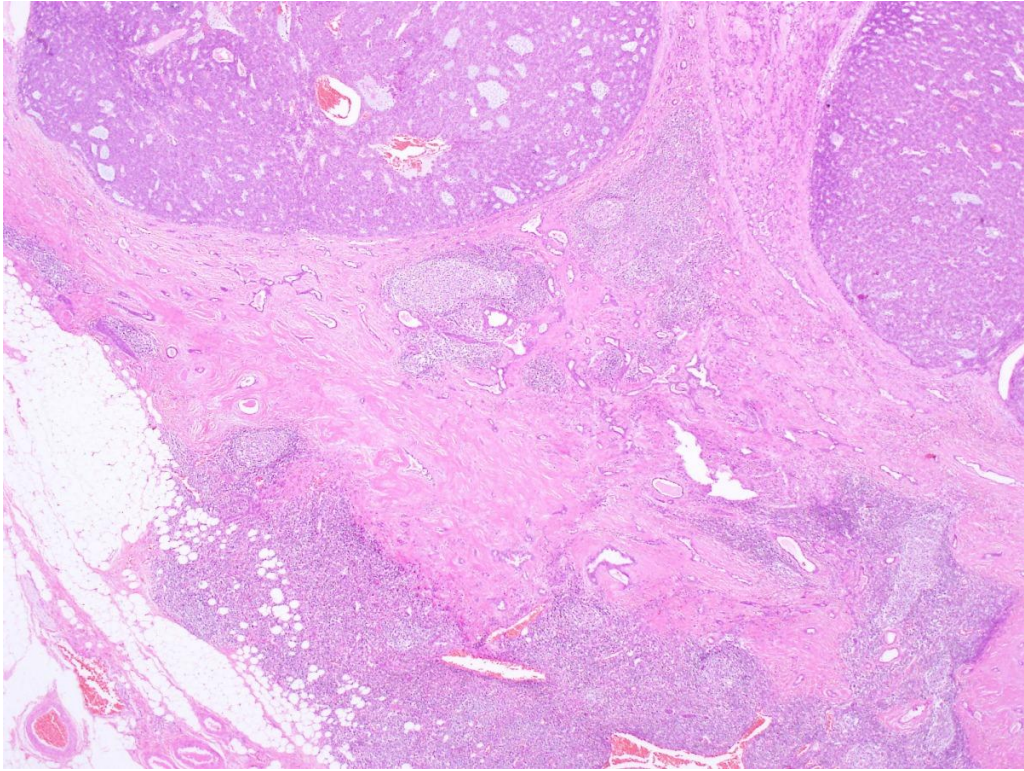
病変は最大断面にて約3.5x3cm大の分葉状、比較的境界明瞭な腫瘍で、内部には嚢胞状構造を伴う白色充実性の結節が集簇し、結節間には種々の厚さの線維性隔壁が介在していた。

組織学的には、それぞれの結節は細胞質に乏しい基底細胞様細胞を主体とし、2層性腺管を混じながら索状配列を呈しており、この部分の像は基底細胞腺腫に酷似していた。しかし、部分的には淡い好酸性胞体を有する基底細胞様細胞とは形容し難い細胞も混在し、これらも類似の索状配列ないしはやや充実性に近い増殖を示した。また前者の領域では2層性腺管は好酸性粘液を容れ、拡張を伴うものが多くみられたのに対し、後者の領域では腺管は小型かつ比較的均一で、明らかな好酸性粘液を含まないものが多かった。嚢胞状構造はこれらの結節内外に存在し、内部に存在するものは基本的に外部のものより大きく、前者の領域の2層性腺管が拡張したものと考えられた。

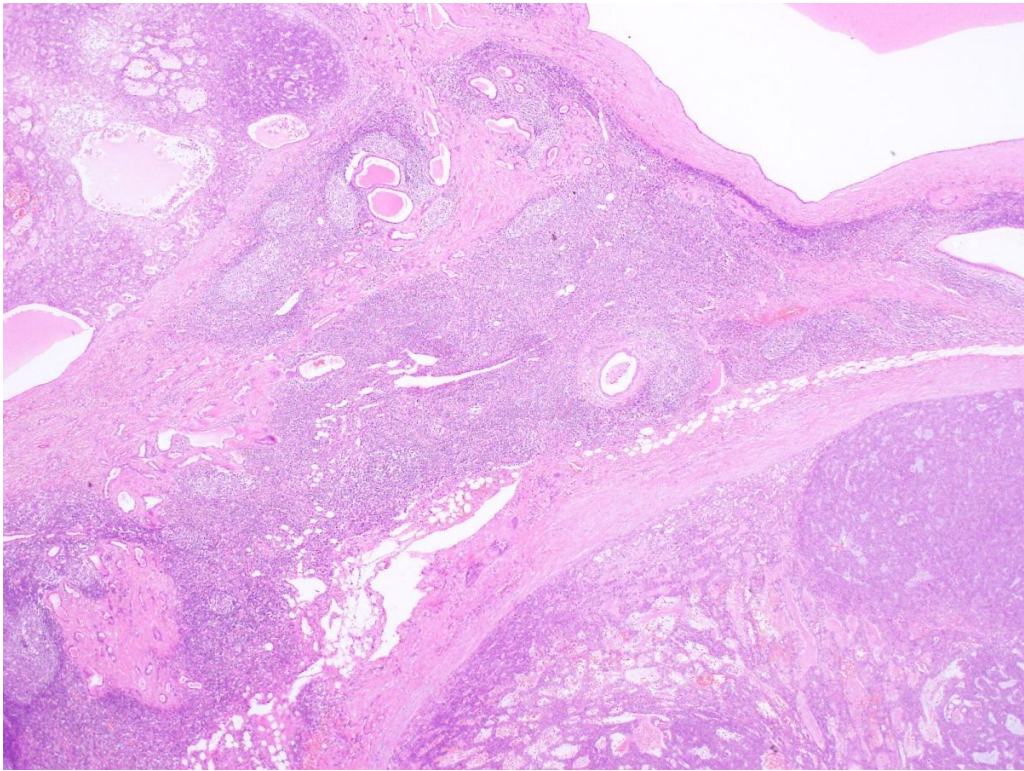
病変周囲の耳下腺組織は腺房の萎縮と導管の拡張を伴い、拡張した導管周囲には著明な線維化もみられた。類似の導管は結節間の線維性隔壁の内部にもentrapされており、結節間に脂肪織が介在する箇所もみられた。さらに病変内外にはリンパ濾胞を伴うリンパ球浸潤が断片的にみられた。

【配布標本】切除標本のほぼ最大断面

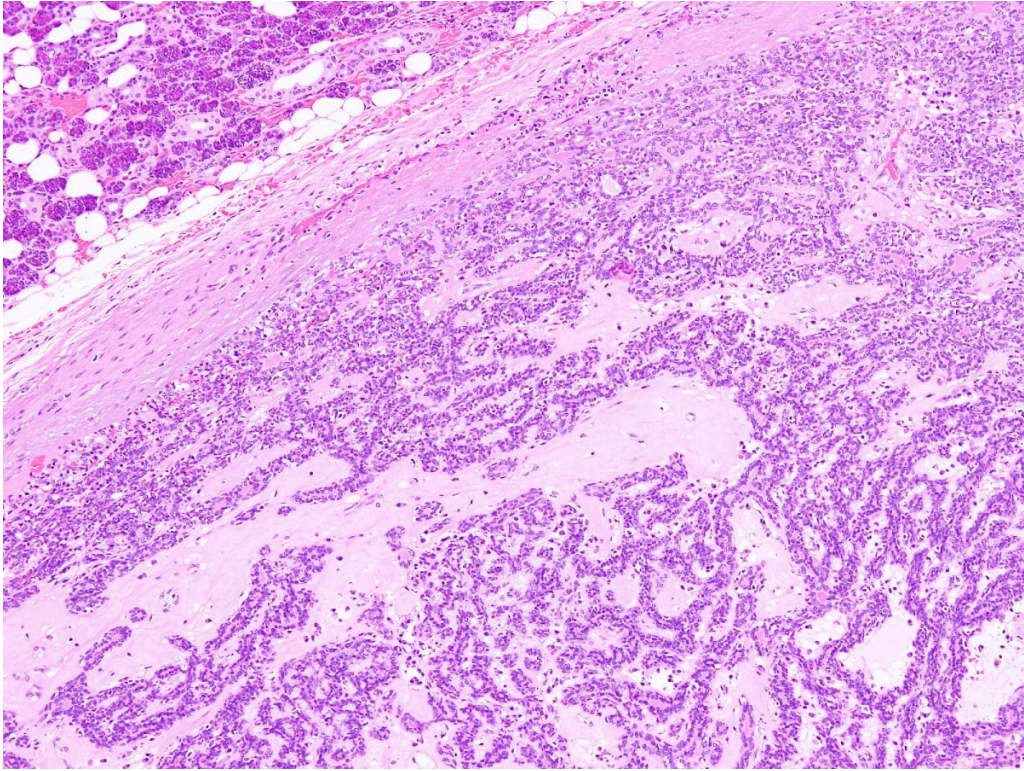
【問題点】病理組織学的診断



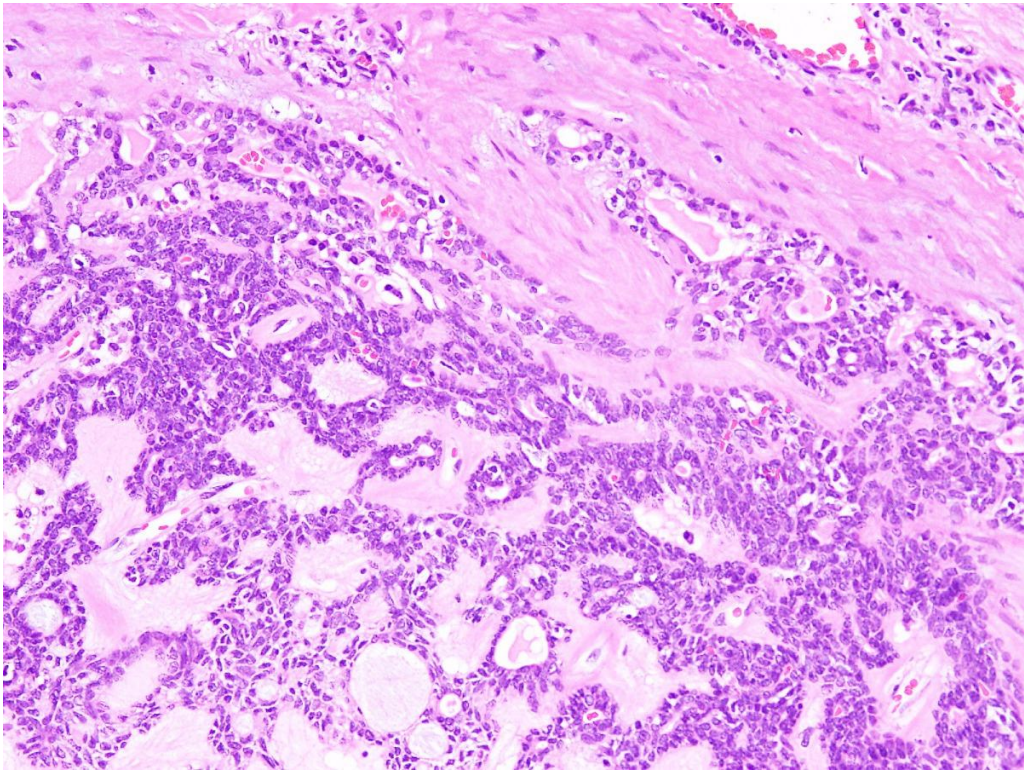
HE像1



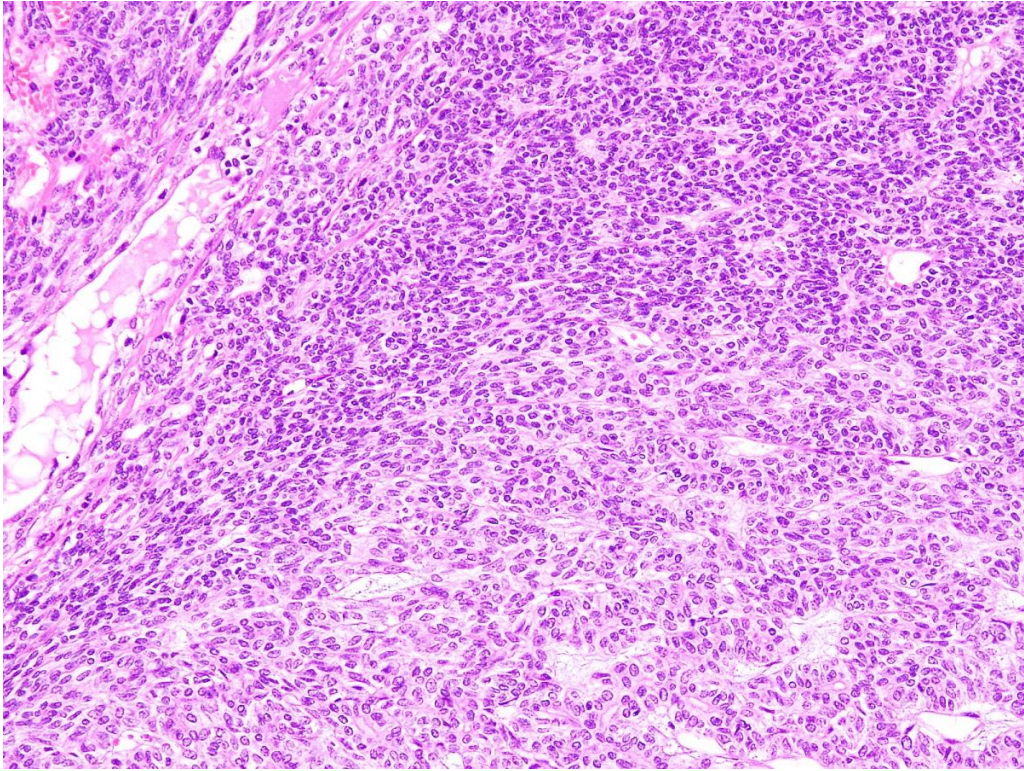
HE像2



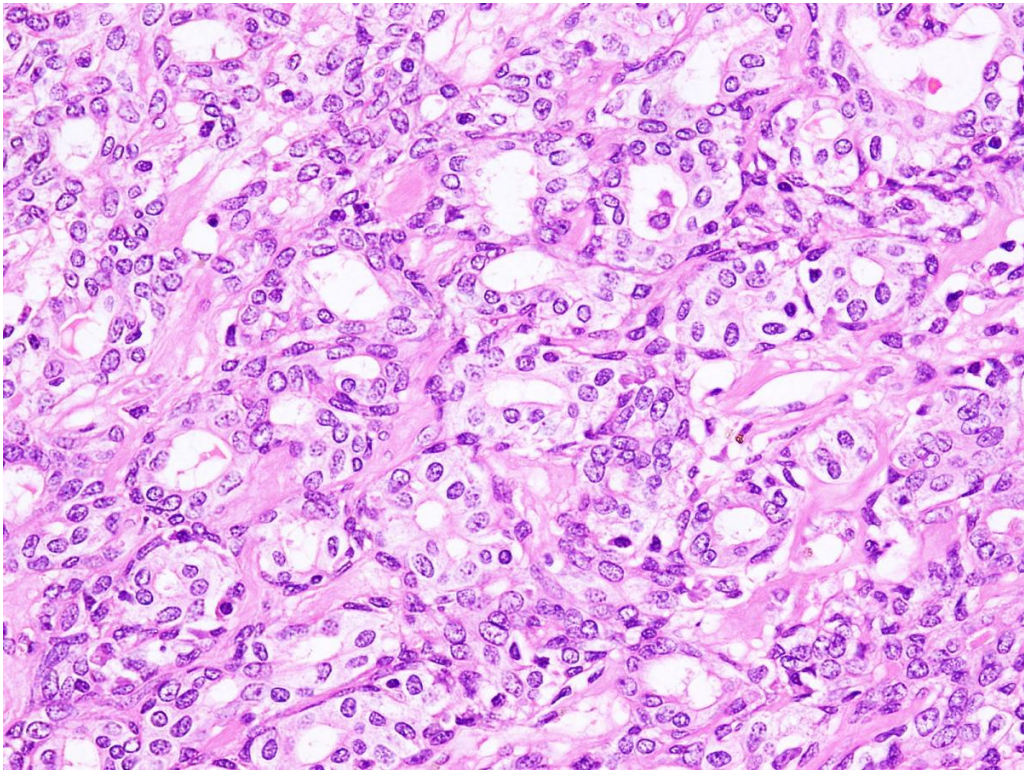
HE像3



HE像4



HE像5



HE像6